

## 内蒙古へ

昭和十四年六月のある日、突然私は、大蔵次官大野竜太氏と秘書課長山際正道氏（後の日銀総裁）から上京を求められた。翌日、上京して役所へ行ってみると、「ここで話をするよりも、ちよつど昼飯時だから一緒に出かけよう」ということになり、芝の料亭に連れ出された。

そこで伺つた話の筋は、「こんど内閣に、占領地行政を担当する『興亜院』という新しい役所ができた。東京に本部、北京、上海、張家口、厦門の四力所には連絡部を設け、それぞれに大蔵省から人を派遣することになった。君には、内蒙古の張家口に行つてもらいたい」というのである。「そこへ行けば、まあ、さしずめ君は大蔵大臣のようなもので、自分の裁量で白紙に絵をかくように、財政や経済の仕事することもできるではないか」などと、若くて感じやすい私の心をくすぐるような口説き方であつた。

私は一瞬考えたあと、「家族もあることだから、一両日考えさせて欲しい」といふことで、その場は引き下がった。帰途、本屋に立ち寄り、中国の地図を買い求めて、中国や内蒙の

状況を調べてみた。すると、北京を中心に東西ほぼ等距離の位置に、天津と張家口がある。北京からそう遠くもなさそうだし、北京には知友もたくさんいる。週末には彼らと会って、歓を共にすることもできようというものだ。漠然とそんなことを考えた私は、単身赴任を決意し、その翌日、山際さんに会って「受諾」の返事をした。

ところが、いざ現地に着任してみると、まさに見ると聞くとでは大ちがいだった。まず張家口という街は、木の全くない、いわば「土の街」である。夏は涼しいが、冬はとくに寒いわけでもない。しかし、飲料水の硬度は十四、五度という高さで、時折、サソリが出没する。それでもウランバートルと北京を結ぶ通商上の要衝であるとともに、政治や軍事の中心であった。事実、蓮沼蕃中将（後の大将）の率いる駐蒙軍が駐屯し、その支配下に蒙古自治政府がつくられ、内蒙に王府をもつ徳王がその主席であった。

内蒙全体の人口構成は、七、八百万人といわれるが、大部分は漢人で、蒙古人はわずかに二、三十万人にすぎなかった。その自治政府の主席に、蒙古人の徳王を据えたこと自体が、いかにも不自然であった。自治政府の最高顧問は金井章次氏で、興亜院連絡部の長官は酒井隆中将であった。

ところが、現地の行政に圧倒的な実力をもっていたのは、何といつても軍司令部で、若い尉官や佐官クラスの参謀が、その権力を誇示していた。だから大野次官がいったように、「白紙に絵をかくように仕事ができる」どころか、現地の軍や政府の連中は、興亜院のわれわれを厄介もの扱いし、「何のためにやって来たのか」といわんばかりの冷遇ぶりであった。いきおい毎日の勤務も楽しかろうはずはなく、私は慍々<sup>おっおっ</sup>として楽しまない毎日を送っていた。ただその中であつて、酒井長官と田中新一参謀長だけが、陰に陽にわれわれをかばってくれたのはうれしかった。

蒙疆連絡部の経済課長であつた私には、占領地における経済政策が矛盾だらけに思えた。現地の実情を知らぬ東京は、杓子定規な低物価政策の原則を固持して譲らなかつた。その結果は、日本側の掌握している物やサービス、例えば石炭、塩、鉄道運賃、電気や電信の料金だけに低物価政策が実行され、現地人の経済圏には、一向に浸透しなかつた。日本は点と線を支配しているにすぎなかつたからだ。そのため、現地から購入する農産物の類は、おしなべて高くついた。

それでも内蒙古は、満洲、北支、中支、南支と同様、日本の占領地行政の一区画を形成

し、中央銀行券も独自のものが流通し、治安はもとより、財政、経済、物価、為替などについて、一応独立した運営が行われていた。それだけに、張家口での約一年半の滞在は、素朴ながら国家の「原型」というようなものを勉強するには、またとないよい機会を与えてくれたものだったといえよう。

### 垣根を越えた友情

昭和十五年十月、私は興亜院本部の經濟部に転勤を命ぜられ、東京に帰った。柳川平助中将の総務長官の下に、鈴木貞一少将（後の中将、企画院総裁）が政務部長、外務省から出向した柳井恒夫氏が經濟部長であった。

興亜院は三宅坂と半蔵門の間の隼町にあり、部課長その他のスタッフは、陸・海軍、外務省をはじめ各省から出向していた。企画院が緻密な計画を売り物にしていたのに対し、興亜院の方は大陸的というか、のびのびした雰囲気のある役所であった。武内竜次元駐米大使、岡原昌男最高裁長官、日本テレビの小林与三次氏など異色ある人材もいた。昼休みには、こうした仲間とよく将棋を楽しんだものである。

私の仕事は石原周夫君（経済協力基金総裁）の後任として、北支那開発株式会社と中支那振興株式会社の面倒をみることであった。北支開発の総裁は賀屋興宣氏、中支振興のそれは児玉謙次氏であった。両社は、中国の北部と中部の鉄道、電力、電信電話、石炭、鉄鉱、製塩、港湾などの会社に投融資し、間接的に占領地行政に協力することを任務としていた。その原資の大部分は、興銀債の発行によって調達される仕組みになっていた。そうした関係もあつて、興亜院にあつて金融全体を見ていた石田正氏（後の輪銀総裁）から親切な指導を受けた。

しかし、両社の投融資会社に対する統制力は十分でなかった。なぜなら、それらの諸会社は、直接、経済の実体をにぎっているばかりでなく、自らも軍や政府と太いパイプで結ばれていたからである。こうした状況の中で北支開発の賀屋総裁は、北中国一帯に大規模の資源調査を行なうことを企画し、畏友大村清一氏（後の内務大臣）を迎えて、大調査局の設置を目論み、その予算案を提出してきた。私はその予算案にきびしい査定を加えて、総裁と真正面から衝突し、ついに鈴木政務部長の調停によって、ようやく縮減された形で調査局が誕生するという結末になった。そのため、副総裁に内定していた大村氏は、その

就任を断わられた。そのことによつて、皮肉にも同氏は戦後追放令を免れ、後年内務大臣として入閣された。

それにしても、私は若気のためとはいえ、随分向うみずなことをやったものである。そのとき、興亜院經濟部の第一課長をしていた毛利英於兔氏は、私に対して「役人も飛行機と同様、離陸と着陸の瞬間が大事なんだ。君はいま、離陸しようとしているところなのだから、あまり上司にたてつくのは慎む方がよい」と、親切に注意してくれたものである。毛利さんは、その後間もなく他界されたが、心の優しい先輩だった。

一方、興亜院という寄り合い世帯の中から、われわれの間に各省を横断した交友関係が育つていった。私を含めて、七人の若手事務官でつくった「七賢会」（後に二人が加わつて「九賢会」となった）がそれである。別に「竹林の七賢人」を氣どつたわけでもない。郷里も違えば、勤め先も違つ若者同士が、薬用アルコールに近い日本酒に足をとられてみたり、胃の腑にしみわたる焼酎にもうろうとなりながら、友情をあたためたものである。文字どおり「飲食歓娛」の友であり、「遊山釣魚」の交わりであつて、お世辞にも君子の交遊などといえたものではなかつた。

大蔵省の大槻義公、宮川新一郎、若槻克彦、満鉄の佐々木義武、通産省の村田恒、鹿子木昇、農林省の伊東正義、鉄道省の磯崎叡らの諸君と私が、その仲間である。先年亡くなつた愛知揆一さんも客員格で出席しておられた。これらの人たちは、その後の活躍ぶりが証明するとおり、いずれも相当有能な人材であつた。後に科学技術庁長官になつた佐々木君は、獅子文六の小説「自由学校」の主人公、五百助のような天衣無縫、数多の逸話の持ち主だつた。また、会津から衆議院に出ている伊東君は、最近こそ酒量は激減したが、酔えばかならず「男いのちの純情……」を高吟し、時と所を問わず寝てしまふ奇癖の持ち主であつた。

こまやかな人情の持ち主の大槻君、どんなに酔つても最後までみんなを見届ける土だつた村田君、寡言ながら斗酒なお辞さなかつた鹿子木君、純情で涙もろかつた宮川君と、それぞれ個性豊かな友人たちであつた。そして、この懐しい会合は、今日にいたるまでなお続いている。後に国鉄総裁になつた磯崎君にいわせれば、「その後三十年余、博徒のように固い仁義と、兄弟以上の親しい情義の中に、あたかも九匹の犬がじゃれ合つごとく、愚者の交わりを続けてきた」ということになるうか。

ただ、このかけがえのない仲間のうち、若槻君は不幸広島で原爆にあつて故人となり、宮川君と愛知さんは、油ののりきつたところで鬼籍の人となつた。いまも皆で集つて飲んでいると、これらの人達が、のっそりと入ってくるような錯覚に襲われることがある。